

### 【はじめに】

胆嚢粘液嚢腫は過剰に分泌された粘液がゼラチン状に胆嚢内に蓄積し、肝外胆管閉塞の原因となったり、胆嚢壊死から破裂による腹膜炎を引き起こすことがある。この病態を引き起こす正確な原因は知られていないが、シェルティーや、本邦ではポメラニアン、アメリカンコッカーなどの好発犬種が報告されている。また膵炎や甲状腺機能低下症、副腎皮質機能亢進症、糖尿病などの内分泌疾患、高脂血症の症例では罹患するリスクが高い。診断には臨床症状、画像診断や血液検査などからの総合診断が必要となる。エコー所見では胆嚢内容物の可動性の消失、特徴的なキウイフルーツ様陰影が観察されることもある。治療は胆嚢摘出、総胆管の開通性の確認が必要となる。今回は当院に来院し、外科的治療を行った胆嚢粘液嚢腫の2症例を紹介する。

### 【症例①】

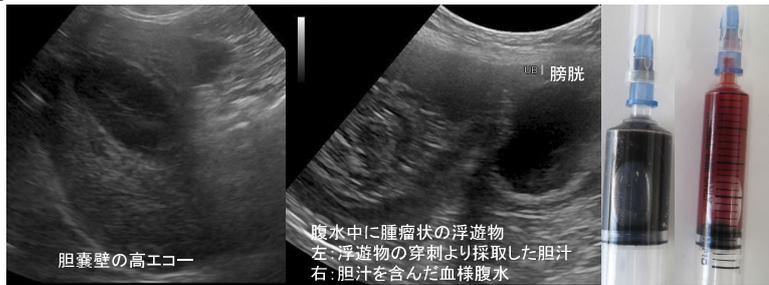
トイ・プードル 10歳5ヶ月 雄

元気食欲の低下を主訴に来院。各種検査にて胆嚢粘液嚢腫の破裂、腹膜炎と診断。同日手術を実施。

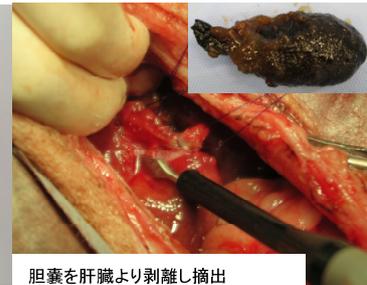
#### <初診時血液検査>

WBC	268	$\times 10^2 / \mu\text{l}$
RBC	4.62	$\times 10^6 / \mu\text{l}$
Hgb	9.2	g/dl
Hct	28.2	%
PLT	79.4	$\times 10^4 / \mu\text{l}$
ALT	339	U/l
ALP	2695	U/l
TBil	0.4	mg/dl
BUN	15.6	mg/dl
Cre	0.5	mg/dl
TChol	>450	mg/dl
Alb	3.5	g/dl
vLip	97	U/l
CRP	4.4	mg/dl

#### <腹部超音波検査>



#### <術中写真>



#### <経過>

胆嚢は破裂しており、内容物は腹腔内に浮遊していた。偶発所見として片側の潜在精巣、肝臓外側左葉先端の腫瘤性病変が認められたため、同時に切除した。総胆管の開通性は問題なかった。病理検査結果は胆嚢は壊死性胆嚢炎、肝臓は結節性過形成との結果を得た。術後経過は良好で、翌日より自力採食が可能であり、1週間後の血液検査ではALT/CRPとも正常値まで回復した。貧血、白血球の上昇は依然みられたが、以降の経過は追えていない。手術約1ヶ月後の電話連絡ではとても元気になっているとのことだった。

### 【症例②】

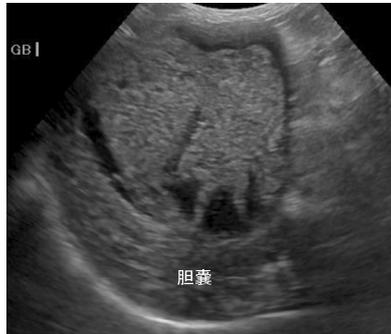
チワワ 8歳6ヶ月 避妊雌

頻回嘔吐、発熱のためかかりつけを受診。胆嚢粘液嚢腫と診断され当院へご紹介頂いた。点滴による水和を行い、翌日胆嚢摘出を実施。

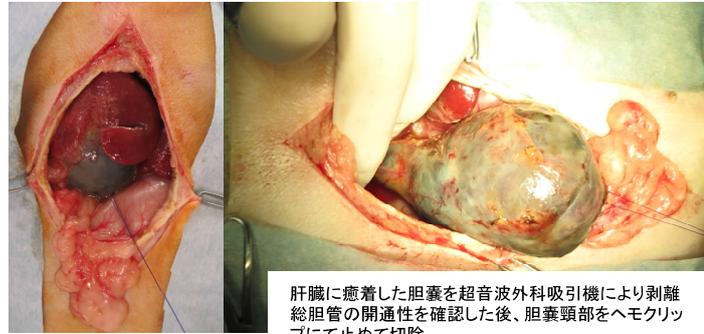
#### <初診時血液検査>

WBC	306	$\times 10^2 / \mu\text{l}$
RBC	6.61	$\times 10^6 / \mu\text{l}$
Hgb	13.3	g/dl
Hct	39.4	%
PLT	27.3	$\times 10^4 / \mu\text{l}$
ALT	453	U/l
ALP	>3500	U/l
TBil	5.5	mg/dl
BUN	28.8	mg/dl
Cre	1.5	mg/dl
TG	475	mg/dl
TChol	425	mg/dl
Alb	2.9	g/dl
vLip	172	U/l
CRP	>7.0	mg/dl

#### <腹部超音波検査>



#### <術中写真>



#### <経過>

術前検査にて膵炎・腹膜炎を伴う胆嚢粘液嚢腫、右腎結石、左尿管結石と腎盂軽度拡張、膀胱結石が認められた。術中は血圧が不安定であった。総胆管の開通性を確認し胆嚢摘出を行ったが、尿管結石については麻酔時間・血圧低下・完全閉塞ではないとの判断から追求しなかった。術後再評価では尿管結石は確認出来ず、腎盂拡張も消失しており、流れていったものと考えられた。周術期は点滴・カテコラミン・尿量モニターにて循環管理を行い、白血球数、CRP、vLip、ALT等は改善がみられたが、腎数値は上昇傾向であった。退院後、自宅では食欲は回復しているとのことだったが、以降の経過は追えていない。

### 【考察】

今回の2症例では、どちらも小型犬であり、10歳と8歳という、中齢から高齢の症例であった。症例①は胆嚢破裂での手術であったが、術後の経過は良好だった。過去の報告では術前の胆汁の漏出は生存率に影響しなかったと報告されている。また別の報告では肝外胆管手術の術後転帰と関連づけられるものとして、敗血症性胆汁性腹膜炎、術前的高クレアチニン血症、手術直後の低血圧を挙げている。今回の症例②では術前よりみられた腎障害、周術期の低血圧がみられており、やはり術後の回復には時間を要した。術後腎数値の上昇もみられており、今後積極的な腎保護が必要と考えられる。

その他負の予後因子として術後乳酸値の上昇が報告されており、当院でも今後胆嚢粘液嚢腫の症例では測定を実施していく必要があると考えている。

### 【参考文献】

- J Am Vet Med Assoc 2009 Feb 1;234(3):359-66.
- Vet Surgery 2004 33:644-649
- Vet Surgery 2013 May;42(4):418-26.

本症例をご紹介頂きました病院様に深謝致します。